

Marco Sottile さんは、フランスからの交換留学生として来日して愛知県立大学で学び、日本語教員課程の教育実習にも参加しました。本号で紹介するレポートは、同大学『2001年度 日本語教育実習報告書』(2002年11月発行)に、彼が、イタリア系フランス人である自身の家族3世代の歴史と現在をアイデンティティー保持の観点からまとめたものを、転載させていただきました。中国/サハリン帰国者とは、“移住”の歴史的背景、出身地と移住地における言葉や文化の距離等々さまざまな違いがありますが、日本における中国/サハリン帰国者を含めた定住型外国人の生活について考えるときの資料として大変参考になるものと思われます。

我がイタリア出身の家族における 言語コミュニケーションと母語・母文化の保持の問題

Marco Sottile

1. 我が家族の1世代: お祖父さんとお祖母さんのこと
2. 2世代: 母と父のこと
3. 3世代: 妹と私/いとこたちと弟
4. フランスに住んでいる日本人のこと

1. 我が家族の1世代 : お祖父さんとお祖母さんのこと

日本にいた時、土屋先生*のお陰で日本語教育にふれることができました。また、「ゆめの木教室」**のようなところに通って、日本に移民した人々がどのような生活をしているのか、どのような悩みがあるのかも観察できて、とてもいい体験になりました。私はフランスに住んでいる3世代のイタリア系の者として、日本で暮らしているブラジル人の悩みは、家族の集まりの際に、両親の口から聞いたことがあります。

さて、我が家族の移民からみて、主として、フランスでの生活のための言語コミュニケーションと母語・母文化の保持の問題について、述べたいと思います。本稿では、家族と外国人の知り合いに聞いたことをできるだけ、誠実に書きあらわそうとこころみました。

フランスへのイタリア人の移民は、ながい歴史があります。その歴史をさかのぼってみると、第1次大戦と第2次大戦の直後に起こった移民ブームが目立ちます。フランスを再建するために、フランスの政府は手が足りなかつたので、イタリアなどの労働者を呼びました。その労働者の中には、ちゃんとした契約をもっていた人も不法で移民した人もいました。どちらかという、イタリアの生活よりフランスという「給料のいい国」へ行くのはまし、といったわけで、1955年に、北フランスに住んでいるお兄さんを頼って、妻をつれて、不法でフランスに入ろうと、故郷のシシリアを去っていった母方のお祖父さんがいました。

* 愛知県立大学日本語教員課程担当

** NPO法人「子どもの国」が主催し、放課後の学習支援をおこなっている教室。国籍を問わずにいろいろな国の子供を受け入れ、学校の宿題の手伝いや母語の学習、悩みの相談等さまざまな活動を行っている。(愛知県豊田市)

1 世代:お祖父さんとお祖母さん

お祖父さんからはじめたいと思います。

お祖父さんはシシリアの農業に従事していた家庭の子で、学校より食糧を稼ぐのが大事という生活条件で、学校に行ったことがありませんでした。無学で、書くことも読むこともできませんでした。フランスに来た時に、もちろんフランス語は話せませんでしたが、お兄さんのおかげで、その当時(1955)、北フランスで盛んであった鉱山と繊維業で働けるようになりました。"頭をつかわない"仕事をするのにフランス語を話さなくても、同じ仕事をするフランスがながいイタリア人もいたおかげで、大丈夫でした。仕事の仲間もほとんどイタリア人だったので、フランス語を勉強するのは必要なかったのです。必要があったとしても、仕事でいそがしくて、フランス語を習う暇がなかったのです。それでもフランス語を一度も勉強せずに、フランス語をわかることも話すこともできるようになりました。

まとめて、その理由は:

- ? 仕事面では、フランス人の仲間との付き合いから、フランス語で簡単な挨拶と仕事で使われている用語をおぼえました。
- ? 家庭面では、子供がフランス語を勉強して、家庭の会話の中にだんだんフランス語が入ってきて、日常生活のフランス語をおぼえました。
- ? テレビもとても重要な役割を果たしました。いつもニュースを一所懸命に見ていたおぼえがあります。ですから、ニュースなどを聞いて、聴解はだんだん上達しているのに対して、フランス語を話さなくてもいい環境で暮らしていたので、フランス語を話すのはほとんど上達しませんでした。

さて、イタリア人の移民に関する本の中に面白いことがみつかりました。イタリア人のフランス社会への溶け込みの過程のひとつの面は、政党と組合の中での活動だったと述べています。どんな政党かというと、フランスに定住するようになったほとんどのイタリア人は共産党に属していました。お祖父さんもそうでした。共産党に属していたイタリア人のプロフィールは労働者で、フランスにしっかり根をおろしたかったので、フランス人と同じ給料、生活水準を

要求していた人でした。つまり、共産党は、イタリア人の社会的な溶け込みに大事な役割を果たしていました。お母さんとお祖母さんに聞いてみましたら、お祖父さんは昔、共産党と工場の組合に属していて、共産党の集会によく参加していたそうです。私の思い出によれば、いつもテレビで政治についての番組を一所懸命に見ていました。実は、内容は全部理解できなかったと思いますが、お祖父さんにとっては義務のようで、見なくてはならない番組でした。

また、イタリア人の移民に関する本でもおもしろいことを読みました。イタリア語とフランス語は語源的に近いので(たとえをあげると、おはよう》BONJOUR/ボンジュール(仏)》BONGIORNO/ボンジョルノ(伊))、フランス語を勉強せずとも、理解することがそれほどできないことはないといっています。そして、フランス語で表現することは、特にフランス社会に馴染んでいないほとんどの一世代にとっては、どうしても発音が下手で話が通じないといっ、できるだけ避けることでした。移民者の一世代の特徴といえば、よく理解できるが、表現は上手にできないのです。

そして、お祖父さんはフランス人と付き合うのはあまり好まなかったのです。その理由としては、まず乗り越えない言葉の壁があって、理解できるといっても100%理解するまではいかず、同じ言葉で話す人と付き合うのが十分で安全だとお祖父さんが言っていました。そしてフランス人からの差別や偏見もあったので、仲間になれるのは難しかったのです。

偏見といえば、外国人労働者は必ず「フランス人の仕事を奪う」人に見られて、フランス人はイタリア人と付き合いがたとはいえないでしょう。お祖父さんの話によると、たしかにそうでした。結局、互いに相手を理解しようとしなかったのです。お祖父さんにとって、イタリアンコミュニティで暮らすだけでよかったと。そして、母語に関しては、家庭の会話はいつもイタリア語というよりシシリアの方言で話していました。孫などからフランス語で聞かれても少し変わった"イタリア語"で答えていました。実は、年を取ってからのお祖父さんは、方言とフランス語の言葉を混ぜて話していました。イタリア人の移民を研究している方の言葉を借りると、そういう現象は「LINGUA SPACA」とよばれています。「リングア スパカ」を直接訳してみると、「割れている語」にな

ります。イメージとして母語にヒビが入って、その中にフランス語が入ってしまうのです。それは主として一世代の現象で、完璧に母語もフランス語も話せなくなっているのです。その現象の理由としては、お祖父さんおよびフランスに移民したほとんどのイタリア人は自分の母語を守ろうとしなかったのです。矛盾していると思われるかもしれませんが、お祖父さんのような人の口からイタリアに帰りたいと一度も聞いたことがないのです。イタリアよりフランスの経済はいいので、自分のためではなく、自分の子供のためにフランスに根をおろそうとしました。実は、フランスにもイタリアにも興味をもっていなかったと思います。

文化保持に関しては、イタリア風の食生活と子育てだけが大事だったそうです。食生活というと、もちろんパスタがおもとして、おもしろいことは、家族の集まりの際に、フランス料理だけあったら、「そんなもんくえるかい、わしにパスタをつくろう!!」といつも言いました。他に、子育てというと、特に娘に対して厳しい子育てで、その点はあとで述べたいと思います。

お祖母さんはお祖父さんと違って、フランスでの暮らしがつかったそうです。シシリアの農業に従事している家庭と、北フランスの大きな町とでは、生活のずれがあまりにも大きくて、鬱病によく陥りました。シシリアの昔の人の考えでは、奥さんが仕事をするのは恥ずかしいので、お祖母さんは仕事したことがありません。ただ家の掃除と買物や子育てというせまい範囲でしか活動していませんでした。ですから、フランス語をおぼえるのは時間がもったかかりました。つまり、子供がフランス語を話せるようになってから、ちょっとしたフランス語をおぼえました。そして、テレビドラマのおかげで、お祖母さんはフランス語を理解できるようになりました。話すのは今でもサバイバルしかできません。言葉の壁のせいで、フランス人とあまり付き合っていないのです。ただ挨拶ぐらいです。公的手続は、まずフランス語ができるイタリア人の知り合いにしてもらって、そして、子供がそれをわかる年になって、子供にもらうことになりました。

結局、時間がかかりましたが、お祖母さんはフランスの生活になれていきま

した。今、得たサバイバルを尽くして、ひとりで買い物したりして、幸せそうです。

お祖母さんはお祖父さんと同じように「リングア スパカ」を話すようになりました。お祖母さんもイタリアにあまり関心をもっていないのです。お祖父さんもお祖母さんも自分がイタリア人だ感じていないのです。ずっとフランスに住んでいますから。でも、フランス人だということも思っていないのです。いわゆるアイデンティティが言葉と同じように割れてしまったと私は思います。

2.2 世代: 母と父のこと

2世代の代表としては、母と父の例をあげたいと思います。

お祖父さんは移民して、2年後、母が生まれました。自分が無学で労働していたお祖父さんは子供に勉強してほしいと願っていました。お祖父さんの言葉でいうと自分の子供が「フランス人よりえらい人」になってほしいと願っていました。フランスでは16歳まで学校は無料で義務なので、母はフランスの学校に通えるようになりました。母の話によると、最初はとてもつらかったそうです。その時の母にとっては、二つの世界があって、イタリア語で話す世界とあまり知らないフランス語で話す世界があったといえます。つまり、家庭の世界と学校の世界です。初めて学校に行った時に、家庭の言葉がイタリア語だけだったので、先生の言うことがさっぱりわかりませんでした。母の話によると、当時、外国人のための教育支援なんかなかったし、あっても決して無料ではなく、行けるお金がなかったの、最初は、ただ学校に通って、母はフランス語をおぼえようとしていました。しかし、先生の質問に答えようとした時、よくフランス語とイタリア語をまぜてこたえてしかられました。母には意地の悪い先生の思い出がたくさんありますが、ひとりの先生だけが、母にはむずかしいと気がついて、母をサポートしてくれました。小学校から中学校に入るまで、サポートされて、フランス語をわかるのも話すのも書けるのもものすごく上達しました。どのようなサポートをうけたかといえますと、普通の授業をとっていたので、わからないと

ころがたくさんあって、それは先生が授業の後にゆっくり説明してくれたり、言葉の覚え方をすすめたりして、とてもたすかったと母がいます。母と兄弟たちがフランス語をおぼえていくうちに、家庭の会話の中にフランス語がだんだん入ってきて、お祖父さんとお祖母さんもフランス語をすこしぐらいおぼえるようになりました。が、3世代がでるまで、家庭の会話は、主としてイタリア語でした。学校時代における母とフランス人との付き合いはゆたかだったといえず、大人と同じように互いに相手を理解しようとしませんでした。その理由としては、フランス人からの偏見やいじめなどがつらかったと母はいます。当時のフランス人にとって、イタリア人は「フランス人のパンをたべる」者やあらばい者などに見られていました。その評判をもっていたイタリア人は子供の世界では「Macaronie」(マカロニ<パスタの種類>食い)のようなイタリアン料理に関係ある軽蔑的な意味をもつ言葉で呼ばれていました。逆に、母達はフランス人を「芋食い」と呼んでいました。

ここでももしろいことは、日常生活の食べ物を軽蔑的な意味で扱って、互いに相手の食習慣、つまり相手の文化かアイデンティティをからかっていた。

そういった状態で、フランス人との付き合いはうまくいくはずがなかったのです。しかもフランス人と付き合わないようというお祖父さんの注意もありました。子供の時イタリア集団の子達だけと付き合うことが許されていました。フランス語がわからない両親にとっては、公的手続さえわかりませんでした。それで、昔それをしてくれた友達のかわりにフランス語がわかる自分の長女にしてもらうことになりました。母の話によると、公的手続を10歳の頃、しはじめたそうです。税を納めたり、社会保険の申込を書いたりするのをがんばってあちこちで説明を聞いたりしていました。特にイタリアの大使館をよく尋ねたそうです。

17歳の夏休みにイタリアにいる家族をたずねた時に、父と出会って、学校をやめて結婚しました。5年イタリアに滞在したので、「リングア スパカ」の現象をさせて、ちゃんとしたイタリア語を話せるようになりました。しかし、母はどうもイタリアの生活に馴染めなかったのです。その時の母の心の中で、自分がイタリア人だと思っただけでしたが、イタリアではフランス人、つまり外国

人として扱われて、いじめられたので、たいへんがっかりしました。結局、父とよく話し合って、私をつれてフランスにもどることにしました。

子育てがおわってすぐ、母は働きはじめました。その時から、フランス人との付き合いがふえていきました。言葉の問題とお祖父さんの命令から解放されたおかげで、フランス社会に完璧に溶け込みました。フランス人のイタリア人に対するイメージがよいイメージにかわったことも重要な役割を果たしました。

お祖父さんとお祖母さんと違って、現在、母は自分がイタリア人よりフランス人だという意識をしています。色々苦労して、フランス社会にやっと溶け込んだので、イタリア社会に溶け込むために、また同じ苦労を繰り返しながらなさそうです。

そう思っている母は、自分の子供にいつもフランス語で話しています。せざるを得ない時だけイタリア語で話すことにしています。ところが、結婚してから、つよくフランス社会への統合の意を示している母はイタリアの食習慣だけは保持しています。週一回以上、パスタを食べなくてははいけません。そしておもしろいことは、フランス料理をつくっても、それをイタリアふうにつくるのです。イタリアの移民の研究者のいう通りに、「文化の中で言葉より食習慣が根強い」です。

父はシシリア生まれで、10歳の時に北イタリアに引越しました。それでフランスにくる前にシシリアの方言とイタリア全国で共通に話されているイタリア語が話せます。

父は男3人、女2人の5人兄弟の三男です。下に妹が1人います。父方のお祖父さんは建築施工業者で、父のお兄さんたちも学校をはやめにやめて、石工に就職しました。同じ道に向かって、父も14歳まで学校に通って、石工の弟子になりました。初めて北フランスに来た父は、もちろんフランス語を話すこともわかることも出来ませんでした。それでも北フランスに多いイタリア人集団のおかげで、石工の仕事を簡単に見つけられました。母方のお祖父さんのように仕事の仲間達はみんなイタリア系のフランス人だったので、言葉は問題になりませんでした。

父はフランス語学校に通ったことはありません。お祖父さんと同じように、テレビニュースを見たりして、自然にフランス語をおぼえました。フランス語で表現することは、もっと時間がかかりましたが(父によると20年かかりました)、今現在、よくフランス語で話せるようになりました。つよいなまりが残っていますが。

フランスに来て、イタリア人が集まるところによく通っていました。私も父につれられて、日曜日の午前中に「Salla」(サッラ)というところによく行きました。「サッラ」のおもしろいところは、イタリア人男性のみ行ける場所でした。そこで男性たちはトランプで遊んだり、方言で政治について話したり、故郷のことを語ったりして、時間を過ごしていました。しかし、フランス語が上達していくとともに、フランス人の友達がふえて、イタリア人集団を離れていきました。

フランスでは70年のイタリア人の移民の歴史をかけて、イタリア人のイメージは「マカロニ食い」や「フランス人のパンを奪う人」のイメージから「よく働く人」や「頑張り屋」のイメージに変わりました。ですから、父はいじめられた思い出がありません。昔のみっともないなまりも現在ではセクシーに聞こえるようになりました。

父の母語はどうなっていたかという、フランス語のほうが多い生活になったので、イタリア語を少しだけ忘れました。たとえば、電話でお母さんと話す時に、どうもイタリアの言葉を思い出せなくて、そのかわりにフランスの言葉をイタリアふうに使ってしまいます。それを聞くと、とてもおもしろいです。

やはり、「リングア スパカ」の現象はフランス社会への統合化から切り離せないことだと考えられます。母と同じように父もフランス社会に溶け込もうとしています。どんなふうにも溶け込もうとしているかという、フランスで自分の家を購入する夢を果たして、フランスに根をおろそうとしています。イタリア人の移民を研究した人によると、ほとんどの1世代の家族の唯一の夢はマイホームを購入することで、それをしてからフランス社会に溶け込むことが出来ると考えられています。

母語や文化が犠牲になってもかまわないと父はいいます。父にとっては、国

家より自分の家族のしあわせが一番大切です。そういいながらサッカーの話になると、必ずイタリアのチームを応援します。フランスで行なったワールドカップの際、イタリアがフランスに負けた時に、とてもがっかりしましたが、逆にフランスが決勝に勝った時はよるこんでいました。なかなか意味深いことだと思います。

後書: 父は食べるのが好きなので、イタリアン料理やフランス料理や日本料理、何でもいいです。

3.3 世代: 妹と私 / いとこたちと弟

2世代の子供の中で、イタリア人と結婚したのは母だけです。母の2人の妹と1人の弟はフランス人と結婚しました。

それは3世代の中で二つのグループを生じさせました。つまり、イタリア語がわかってイタリア語で表現できるグループと両方ができないグループです。第1グループは妹と私だけです。第2グループはいとこたちと弟です。

まず妹と私のことについて述べたいと思います。

3世代の中で、最初に生まれた子供は、私と2歳離れている妹です。妹とちがって私はイタリアに生まれて、1歳の時、フランスに引越しました。フランスに引越したといっても、お祖父さんもお祖母さんも父もイタリア語で話していたので、家族の会話は、ほとんどイタリア語でした。母と母の兄弟だけは、私達にフランス語で話していました。ですから、イタリア語もフランス語もはやくわかるようになりました。しかし、話す言葉はほとんどフランス語でした。子供の時、会話をどのようにしたかという、イタリア語で聞かれて、フランス語で答えるというようなことをしました。

お祖父さんとお祖母さんはフランス語がわかって、問題がありませんでした。父と父方の家族だけに対して、イタリア語で話していました。こどもの時、イタリアへ行く3か月前に、毎日父とイタリア語会話の練習をしていたおぼえがあります。12歳まで、毎夏休み、イタリアの家族を訪れていましたが、最近はいろいろでいそがしくて、イタリアの家族と会う機会はめずらしくなくなってきま

した。だんだん父がフランス語をわかることも話すこともできるようになってきたとともに、妹と私はイタリア語を上手に話せなくなりました。そして、読むことができますが、書くことはなかなかできません。ですから、イタリアで勉強や仕事などしようとしたら、時間と努力がなくてはなりません。母語というより外国語になってしまったかもしれません。

フランス社会に溶け込んだ親のおかげで、3世代の子供のフランス語教育はやさしいです。たしかに妹と私は幼稚園に入る前にフランス語に馴染んでいたのも、母より簡単だったと思います。イタリア人のイメージもだいぶかわったので、差別やいじめなんか体験したことはありません。しかもフランスの教育制度はとてもよくて、フランス人と平等に長い期間勉強もできるし、差別なく就職もできます。またよいのは奨学金制度です。お金のない家庭の子供が大学にはいると、その一人一人に奨学金がもらえます。

さて、いとこたちと弟は、うまれたのが家族にフランス語が普及した時なので、イタリア語がほとんどわかりません。問題は、お祖父さんとお祖母さんとのコミュニケーションです。実はなんともいってもお祖父さんとお祖母さんは家族の中でフランス語であまり話さないの、孫と話にほとんどなりません。お祖父さんのということがわからない孫は、お祖父さんからはなれてしまう結果になります。

しかし、その問題からおもしろい現象が生じます。それは次に述べたいと思います。最近テレビでフランスに住んでいるアルジェリア人に関する番組を見ました。その番組の注解者の話によると故郷に執着を感じる世代は1世代ではなく、2世代でもなく、実は3世代と述べていました。なぜかという、ほとんどの3世代の若者は自分の根がどこにあるかがわからないのです。親が苦勞して自分のアイデンティティを犠牲にしてフランス社会に溶け込みました。それで3世代は親がうしなわれたアイデンティティ、自分の根、自分の故郷を取り戻す意をつよく示します(注解者によると狂信までいくこともある)。その現象はアルジェリアの集団の特徴だけではなく、イタリア人集団の3世代の

若者にもみられる現象です。通信教育でひとりで勉強したり、休日にイタリア学校にかよったり、大学でイタリア語学科を選んだりする3世代の若者がたくさんいます。昔、親が自分のアイデンティティについて語ろうとしなかったのは、それはハンディキャップだったからです。3世代にとっては、二つのアイデンティティをもつのはチャンスだと思うべきだと思っています。

おもしろいことは、3世代の若者は親よりイタリア人だと感じているのです。人間のところがどっちの国に傾いているかと、ワールドカップの際にどっちのチームを応援するかということからわかるのです。弟も妹もいとこたちも私もフランスのワールドカップの際、イタリアが負けた時になんともいえないかなしい気分でした。そしてフランスが勝った時にまたがっかりして、ブラジルに勝ってほしかったのです。つまり1世代と2世代とちがって、3世代のころの中にフランスを否定するところがあると思います。

現在、兄弟と私は独習でイタリア語を勉強しています。私にとって、家族のアイデンティティを守る/保つために、自分の子供にイタリア語を教えたいと思います。

4 . フランスに住んでいる日本人のこと

最後に、フランスで暮らしている日本人の知り合いのことについて述べたいと思います。2年前に、北フランスにトヨタが工場をつくるというきっかけで、家族をつれて出張する社員がふえてきました。

それでは、短期間、外国でくらしている日本の家族がどんな問題に直面しているかにふれてみたいと思います。

知り合いのAさんのご主人はトヨタの中で重要な役で、北フランスの工場を設立するために4年間の出張を命ぜられました。4年間は長いので、Aさんは二人の子供をつれてフランスで暮らすことにしました。フランスの前にカナダで

2年暮らしていたので、フランスで暮らすことにあまり不安をもっていませんでした。

しかし、カナダの体験とちがって、子供の日本語教育が心配になりました。現在、Aさんは二人の子供をもっています。ひとりには女の子で中学校2年生で、もうひとりには男の子で小学校6年生です。カナダの滞在の時、ふたりは子どもだったので、子供の教育のことは問題ではありませんでした。しかし、フランスから帰国してから、中学生の女の子がよい高校に入るのに、日本語教育をしっかりとしていないとどうなるかと悩んでいます。

Aさんが住んでいる地域に日本人学校がひとつもありません。なぜかという、子供の人数がすくないからです。Aさんによると外国で日本人学校を設立することは日本の文部省だと言っています。それで、やむをえず、週一回だけ(土曜日)、ベルギーにある「日本学校」に通うことにしました。Aさんによると、フランス語より英語は役にたつので、平日はAさんの子供は近くにある国際学校に通っています。

その国際学校の英語教育はフランス人向けの英語教育で、子供にとってはたいへんだそうです。生徒はほとんどフランス人なので、先生の説明はもちろんフランス語です。子供はフランス語がわからないので、日本人の友達だけとつきあっていて、勉強にならないといういろいろな不満があるとAさんが言います。平日は国際学校、土曜日はベルギーの「日本学校」、それに加えて、日本語の通信教育があります。子供にはたいへんだし、お金もかかるので、フランスにこなかったら、よかっただろうとAさんは思っています。

そして、家庭の主婦としてのAさんのフランス暮らしについて述べたいと思います。フランスに来て、フランス語がわかりませんでした。話すことさえできませんでしたが、すぐフランス語の勉強にまじめに取り組んで、2年間でものすごく上達しました。実は、カナダで習得した英語をフランスでいかそうとしましたが、北フランスに住んでいる小さなまちでは英語がなんといってもあまり通じません。ですから、フランス語をおぼえるために、日本語で書いてあるフランス語の通信教育の本で勉強したり、日本語がわかるフランス人の家庭教師と会話の練習をしたりして、日常生活に必要なフランス語をおぼえました。

しかし、問題なのはフランス人との付き合いです。店の人以外にフランス語で話すのが自信がないため、フランス人の友達がいません。Aさんの人間関係の範囲は同じ地域に住んでいる日本人の主婦で、とても狭い世界なので、居心地がわるくて、日本人との付き合いもゆたかではありません。Aさんにとって、フランスで快適な生活をおくるには、フランス語でないといけないと。